

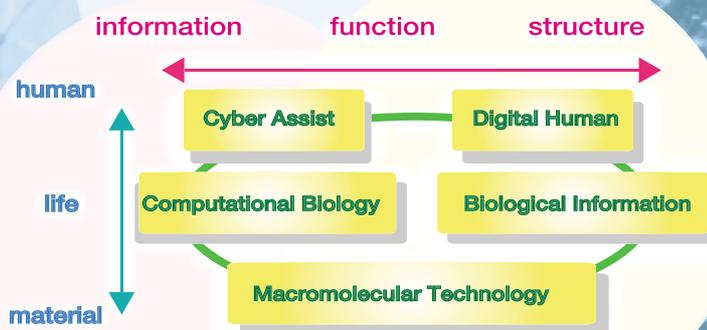
AIST Waterfront Symposium

産業技術総合研究所臨海副都心センター国際シンポジウム

- The Ring of Sciences -

日時: 2001年7月12日

会場: 日本科学未来館 7階
みらいCANホール



国際大学村の開村イベントに合わせ、表記の臨海副都心センター国際シンポジウムが、7月12日(木)日本科学未来館7階みらいCANホールにおいて開催されました。AIST Waterfront Symposiumとしては今回が第一回なので臨海副都心センターのお披露目という意味も含め、講演内容は臨海副都心センターの5つの研究ユニット(生命情報科学研究センター・生物情報解析研究センター・サイバーアシスト研究センター・デジタルヒューマン研究ラボ・高分子基盤技術研究センター)の紹介とその関連分野の第一線で活躍する研究者の招待講演で構成されました。

副題が「The Ring of Sciences」とあるようにコンピュータと人間、生体高分子、化学を新たな絆で結びつける意欲を示したシンポジウムでした。

吉川弘之理事長の開会挨拶でシンポジウムはスタートし、Sustainable developmentにおいて科学技術の果たすべき役割と、産総研と臨海副都心センター



曾我 直弘 臨海副都心センター所長

の使命について強調しました。続いて曾我直弘臨海副都心センター所長による産総研臨海副都心センター各研究ユニットの概要紹介の後、国際大学村紹介ビデオで臨海副都心センターの国際大学村における位置付けを説明しました。



吉川 弘之 理事長



Dr. Jeffrey Skolnick

Donald Danforth Plant Science Center (DPSC, <http://bioinformatics.danforthcenter.org>)のComputational and Structural Biology 部門ディレクター、ワシントン大学生物化学助教授兼任。エール大学にて高分子統計力学で博士号取得。専門は計算機生物学。



日本科学未来館

AIST Waterfront Symposium - The Ring of Sciences

午前中のセッションはライフサイエンスをテーマとし、始めにJeffrey Skolnick博士による招待講演が行われました。Skolnick博士は大規模並列コンピュータを使った蛋白質構造予測研究の第一人者で、2000年12月に国際的蛋白質折れ畳み計算コンテストである4th Community Wide Experiment on the Critical Assessment of Techniques for Protein Structure Prediction (CASP4) の新規フォールド部門第2位を受賞されています。博士は「Prediction of Protein Structure and Function on a Genome Scale」というタイトルでゲノムのシーケンスから蛋白質の構造さらに蛋白質の機能を予測するパラダイムを確立しつつある自らの研究について、CASP4でのデータも含め大変エネルギーに講演をされました。

Skolnick博士の招待講演に続き、生命情報科学研究センターについて秋山泰センター長が、生物情報解析研究センターについて京極好正センター長から説明がありました。

昼食をはさみ、午後の部前半の情報エレクトロニクスセッションでは、SRI International のInformation and Computing Science部門の副部門長であるWilliam Mark博士が招待講演を行いました。SRI International

は産学官連携の典型的な組織であり、独立した研究機関としては最も大規模な研究所のひとつで、産総研の先輩格にあたる組織と言えるでしょう。Mark博士は「New Directions in Information Technology」と題して、毎日の生活のあらゆる面で人の世界とコンピュータの世界の壁のない相互浸透を目指した研究(Pervasive Computing)の方向を示されました。このような相互浸透を実現する為に必須となるコンピュータネットワークにおける防護システム設計の話題では、人の免疫機構の仕組みとの類似性を生命現象とコンピュータの間の共通分野のアナロジーとして例示しておられたのは興味深い点でした。

続いてサイバーアシスト研究センターの紹介を中島秀之センター長が、同じくデジタルヒューマン研究ラボの紹介をアメリカ出張中の金出武雄ラボ長(カーネギーメロン大教授兼任)に代わり持丸正明副研究ラボ長が行いました。

コーヒープレイクのあとに行われた最後の材料セッションでは、昨年度ノーベル化学賞を受賞された白川英樹博士が3人目の招待講演者として、ノーベル賞受賞講演と同じ「導電性高分子の発見と開発」というタイトルで登壇されました。20世紀初頭の



Dr. William Mark

世界最大の非営利独立研究機関の一つ、SRI International (<http://www.sri.com> 前身はスタンフォード大学の附属研究機関Stanford Research Institute) の Information and Computing Science部門の副部長。MITにてコンピュータ科学の博士号取得。専門はパーベイシブコンピューティングとシステムデザイン。



白川 英樹 博士

東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了。工学博士。内閣府総合科学技術会議議員。筑波大学名誉教授。1983年「ポリアセチレンに関する研究」で高分子学会賞、2000年「導電性ポリマーの発見と開発」でアラン・ヒーガー教授、アラン・マクダイアミッド教授と共にノーベル化学賞を受賞。

H. Staudingerの研究に始まる高分子研究の歴史を振り返りながら、ご自身の導電性高分子研究の経緯と意義と最近の応用例を示しながら、例のごとく飾らないとつとつとした調子で話されました。高分子そのものの発見と導電性高分子の研究の両方において化学と物理学の共同による今で言えば学際的研究の意義について強調しておられたのが印象的でした。その後、白川博士の東京工業大学時代の後輩にあたる中濱精一センター長から高分子基盤技術研究センターの紹介がありました。

最後に平石次郎産総研副理事長から各招待講演者へのお礼とシンポジウム参加者への感謝の言葉で閉会となりました。

オープンしたばかりのみらいCANホールには、約300名の方がお見えになり、外部からの参加者の内4割は民間企業からの参加者で産業界の臨海副都心センターへの関心の高さが伺われました。惜しむらくは研究ユニット紹介

には1ユニット当たり20分と充分な時間を取ることができず、アンケートでは「もっと詳細な情報を知りたい」、「今度は研究ユニット個別のシンポジウムを開催して欲しい」というご意見も寄せられました。この点は次回以降のAIST Waterfront Symposiumの課題となりました。

